



フィールドこそが宝庫

——会長就任にあたって——

全国公害研協議会長

吉 本 健 二

この稿の筆を進めている6月29日、東京先進国首脳会議は石油輸入抑制を申し合せて、2日間の幕を閉じようとしています。一方この日、ジュネーブではOPECの総会が石油の大幅値上げを決めて、その幕を閉じました。この奇妙な暗合のもとに世界は新しいエネルギー危機に静かに突入しようとしています。昭和48年秋の石油危機が突然、荒々しく始まっただけに、今回の新しい石油時代の幕明けは特に印象的です。1985年に予想されていた第2の石油危機がどうやら6年早くやってきたようです。これからの日本は、世界はどのように変わっていくのでしょうか。

危機と言えば一頃の公害がそうでした。しかし私は公害に限っては、日本人の心と技術を信ずるがゆえに終始楽天的でした。事実、この公害問題も国をあげての努力で破局を回避することができました。このことは、日本人が世界に誇りうる大きな功績の一つだと思っています。この間、幸いなことに環境に関する新しい知見を豊富に蓄積することができましたし、また知り得たもう一つのことは、摩訶不思議な自然の奥がいに深いかということでもありました。このことは、われわれの学問の分野を大きく広げてくれることにもなりました。

そんな時期に全国公害研協議会の会長という大役を仰せつけられることになりました。ちょうど協議会のなかで、公害研の今後はいかにあるべきかが、深刻な問題として提起されていた時期でもありました。大変な仕事だとは思いますが、先人の残された大きな足跡の延長線上に足をすえて、私なりに力一ぱい努力したいと思っています。

われわれの所属する公害研の生い立ちは実にさまざまで、生い立ちそのものがその地方の公害の歴史を象徴していると言っても過言ではないほどです。それぞれに特長ある名称、組織、機構、業務を持ち、そのなかから特色ある業績をあげてきたのが実情ですが、そのなかにも公害研に共通した一つの特長があります。それは個々の公害研がそれぞれに一定のフィールドを持ち、しかもこれと密接不可分な関係を持ち続けながら、今日に至っている点だと、私は思っています。私はこのフィールドこそわれわれのみが持ち得る宝庫だとさえ自負しているのです。全国61の公害研が手をつないで、初めて素晴らしい成果が期待されるという主題もあり得るのではないかと、などとそんなことも夢想するのです。

私は公害研の将来については、いろいろ問題はありますが、このさいむしろ明るく、陽気に考えていきたいと思っています。

会員および関係各位の御支援を切にお願いする次第です。